



## 修辞学のすすめ

学長 松田幸子

「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。」これは『新約聖書』ヨハネによる福音書（『聖書』口語訳、日本聖書協会）の冒頭の部分である。

『新約聖書』は最初ギリシア語で書かれたが、ギリシア語では、言（ことば）はロゴスとなっている。それは論理、理性、世界を支配している法則などを意味する。この部分の解釈は研究者を悩ませているらしいが、一般的にはロゴス讃歌であるということである。（ジークフリ・シュルツ著『新約聖書註解、4、ヨハネによる福音書』松田伊作訳、ATD・NTD聖書註解刊行会、1975年）

『新約聖書』が書かれる約400年ほど前、古代ギリシアの弁論家で修辞学者のイソクラテス（Isocrates, 前426～338）は、人は言葉と文字を持っている点で他の動物と本質的に異なっていると述べ、話すことと、文章を書くことを学ぶことは、人間性を高めることだと言って修辞学的重要性を説いている（廣川洋一『イソクラテスの修辞学校』講談社学術文庫、2005年）。彼はアテナイに修辞学校を開き若者たちを教育したというが、若者たちはギリシアだけでなく、イタリアや黒海沿岸からも集まったという。

最近では修辞学という言葉はあまり聞かれなくなったが、この学問は古代ギリシア以来12世紀のヨーロッパに現代のような形の大学が誕生したときまで生き続けていた。そして専門課程の神学、法律、医学の各分野に進むまえに、学生は自由七学科としてラテン語の文法、論理学、修辞学、幾何学、算術、天文学、音楽を履修しなければならなかった。この伝統は現代の大学にも受け継がれて、大学教育では一般教養科目が重視されているのはよく知られているとおりである。

それでは正しい言葉話し、よい文章を書くにはどうすればよいであろうか。これにたいしてはそれぞれの人によって意見が異なるであろうが、私は広く正しい知識を蓄積し、豊富な語彙を持つことだと考えている。そこで自分の専門分野にとらわれず、できるだけ広範囲にわたって本を読むことが必要になる。そしてよい文章に出あったときには暗記してしまうのである。たとえば『太平記』の次の文などは、一度読めば忘れることができないほどの名文である。

「落花の雪に道迷う、交野（かたの）の春の桜狩り、紅葉（もみじ）の錦を着て帰る、嵐の山の秋の暮、・・・」（『太平記』1、長谷川端校註・訳、小学館、1994年）。

このような名文は『歎異抄』や『正法眼蔵』にも見ることができる。

すべての動物は食事をすることによって生命を維持している。人は食事と同じように読書によって精神生活を維持しているのである。

本学のような小さな女子短大の図書館でも、65,000冊の蔵書を持っている。学生の皆さんには、在学中このなかから少なくとも50冊の本は読んで頂きたいと願っている。それによって皆さんの言葉と文章はよくなり、人間性は高められるのである。

### 目次

修辞学のすすめ
「もしもし亀よ 亀さんよ」
眠れない夜に
時間泥棒
「本」との出会い
絵本との出会い
憧れの場所で学ぶ
図書館実習で学んだこと
私と図書館
図書館ガイド
図書館ニュース

学長	松田幸子	1	
幼児教育学科	教授	北村恵子	2
幼児教育学科	専任講師	山口美和	3
総合文化学科	専任講師	増田榮美	4
幼児教育学科	1年	小林春香	5
幼児教育学科	2年	若月奈緒子	5
総合文化学科	1年	山之内美里	6
総合文化学科	2年	小宮山温子	6
総合文化学科	科目等履修生	山浦陽子	6
			7
			8

### CONTENTS

## 「もしもし亀よ 亀さんよ」

幼児教育学科 教授 北村 恵子

♪もしもし亀よ 亀さんよ♪で始まる「兎と亀」の歌は、日本人ならどなたもご存知のはず。

幼児教育学科で「音楽表現指導法」を担当している私は、入学したての1年生たちと、この歌にセッセッセの手遊びをつけて楽しく遊びます。ジャンケンをしたり、速くしたり遅くしたり、しっぺを加えたり、足ジャンケンもしたり。歌・リズム・動きなどを使って、遊びながら音楽的な能力や身体のような機能を伸展させるポイントを学習しています。

ある時、私が覚えているこの歌の2番の歌詞♪何とおっしゃる 兎さん そんなら私と かけ比べ♪の、“そんなら私と”の部分で“そんならお前と”となっている歌詞を見つけました。“私と”と“お前と”では兎と亀の立場が微妙に異なってしまいます。そこで、この兎と亀の話について調べることにしました。

この話は“素質も磨かなければ努力に負けることが多い”ことの例え話として、日本人ならほとんどが知っていると思いますが、1番はよく知っていて歌えても、2番、3番、4番になるとうろ覚えで、何だっけ?となる人が多いようです。さて、どうして誰でもが何となく歌えるのでしょうか?

それは、これがイソップ寓話からとられた話で、昔小学校の教科書にも載っていたからなのです。皆さんはイソップ寓話をご存知ですね。例えば、代表的なものでは「兎と亀」のほかにも、「蟻とキリギリス」「牛のまねをする蛙」「ねずみの相談(誰がネコの首に鈴をつけるか)」「狼がきたとウソをつく少年」などです。イソップ寓話は、明治25年には文部省編纂の「尋常小学読本」という国語教科書への掲載が始まりますが、先ほどあげた代表例は明治33年の尋常小学校の国語読本に載っています。今から100年以上も前のことです。その後も、イソップ寓話は国定教科書時代には大人気で、多くの話が載せられていたそうですし、それは昭和17年の第5期国定教科書の段階まで続きました。また、「兎と亀」は明治34年には幼年唱歌の教材ともなっています。つまり、小学校の唱歌教材として扱われました。因みに、イソップ寓話ではありませんが、その当時の唱歌では「キンタロウ」「さるかに」「おつきさま」「うらしまたろう」などが歌われていました。メロディーがついて歌われると記憶に残り易くなることも多く、「兎と亀」もその例といえましょう。そして、時代を経ると、それがイソップ寓話とは分からなくなってしまうこともありました。よくできた日本の修身話と勘違いすることも多かったのではないのでしょうか。

さて、イソップはどんな時代のどんな人だったのでしょ

うか。それが実は驚くことに、およそ紀元前600年前後に今のエーゲ海近辺に生まれ、同550年前後に殺されているのです。奴隷として働きながら、機智に富んだ寓話話りの才能によって人気を得て、主人から解放され自由民となった後、その才智がかえって禍をなして住民に憎まれ殺されたいらしいのです。奴隷ははっきりものをいうことができなかつたために、寓話の形で語ったのではないかともいわれています。その伝承を次の世代が語り継ぎ、紙の出現によってそれが書き留められていったという経緯があり、あのアリストテレスもイソップ寓話を元にして論述したという証拠もあるそうです。そして、本当のイソップ寓話に加え、その時代の人々の様々な処世訓も加わり、何千年という長い間私たちの教訓話として生き続けてきたのです。

日本では1593年に口語訳日本語版ローマ字本が出版され、『エソポのハプラス』『伊曾保物語』として、昔から現在に至るまで、わが国の教訓話に影響を与え続けています。面白いと思う話でも、日本独自な話かと思えばそうでもなく、イソップ寓話を元にしたものも多く見られ、様々な変容をしながらそれは普及していったとのことでした。毛利元就の「三本の矢」の話も、その原型はイソップ寓話に見られるそうです。改めてイソップ寓話集を読むと、あれもこれも元はここなのかと思うほど、よく似た日本の話が存在していることに驚きを覚えます。きっと、国定教科書に載ったことが日本中に浸透した大きな理由だったのではないのでしょうか。

なお、寓話とは、動物の間のできごとなどに例えをとって、処世的な教訓を聞き手に伝えることを目的とする話のことです。

さて、話を「兎と亀」に戻しましょう。調べるに連れて、多くの本には兎と亀が対等な立場で語られるものが多いことが分かりました。したがって、2番の亀のセリフは“そんなら私と”ではなく、“そんならお前と”の方が一般的かもしれません。しかし、紀元前からの伝承話ですから、何が本当かは誰にも分かりません。

イソップ寓話が紀元前生まれの人が考えたものだったことも吃驚ですが、それが現代人にとっても新鮮な話に感じることは二度吃驚です。そして、現在の私たちの生活にこんなに身近だったことに三度吃驚です。

今回これを書くに当たって、図書館司書の方々の力を大いに借りました。感謝です。



# 眠れない夜に

幼児教育学科 専任講師 山口 美和

幼い頃、私は、部屋の明かりをつけたままでなければ眠れない子どもだった。訳もなく暗闇に怯えていた。そこは家具の配置から天井の高さ、壁の近さまでもよく知っている自分の部屋である。なのに、光が遮断された途端に、すべてのものが輪郭を失い、溶解し、闇を伝って自分を圧迫してくるような恐怖に襲われた。

大学院で哲学の勉強をしているとき、この恐怖を的確に言い当てている小さな論考に出会った。「ある(イリア)」(1946年)と名づけられたその小論は、リトアニア出身のユダヤ人哲学者、エマニュエル・レヴィナスによって書かれたものである。レヴィナスは言う。

「諸事物の形式が夜のうちに解体するとき、事物でも事物の性質でもない夜の闇が、ある現存のごとく侵入してくる。…(中略)不眠においては、われわれはもはや何ものとも係わらない。これやあれは存在しない。『何か』は存在しないのだ。…自我と呼ばれるものそれ自体が夜に呑み込まれ、浸食され、非人称化され、窒息させられる。…夜の空間は充溢しているが、それは、何もないことで充溢している」(「ある」『レヴィナス・コレクション』ちくま学芸文庫、216-217ページ)

不眠は、あらゆる事物が匿名と化した「ある」の経験そのものだと言はう。フランス語で「ある」は、il y a (イリア)。il は、il pleut (雨が降る)などのように、非人称的な出来事に用いられる主語、y は「そこに」、a はavoirの3人称単数の活用形である。暗闇の圧迫を感じながら目覚めている、あの不安な重みが、「ある」の経験だとは、いったいどういうことだろうか？

私たちが慣れ親しんでいる世界は、さまざまなモノが形や性質をもって現われることによって成り立っている。それらのモノと、今この場所向き合うことによって誕生する「私」がいる。これが、現象学と呼ばれる学問における、世界と私の成り立ちに関する基本的な理解である。つまり、意識の主体としての「私」は、世界との相関においてしか存在しない。

たとえば今、あなたが見ている風景は、あなたが立っているまさにその場所からしか見えないはずだ。その視点と視野は決して、他の人のそれと重なり合うことがない。私たちは身体の厚みを持っているから、あなたが今見ているものを、同時にまったく同じように見ることは、他の誰にもできないからだ。とすれば、今そこで、その風景を見ているという事実こそが、そしてそれだけが「あなた」の存在をはっきりと指差すのだ。「あなた」とは誰か？その問いに対する答えを突き詰めていくと、「今/ここ」で「あれ」や「それ」の現象に立ち会っている者がそれで

ある、という答えに行き着く。私たちの存在は、世界に位置を占める固有の視点と風景の方から規定されるのである。

暗闇の中で目覚めているときに感じる不安の理由は、恐らくここにある。

光が排除された漆黒の中で、すべてのモノの輪郭が溶け出す。「これ」や「あれ」はもはや存在しない…しかし、暗闇はまったくのカラッポ(=無)だというわけでもないのだ。名づけることのできない匿名の「存在そのもの」が襲ってくるような、重苦しく充溢した空間。この中で、「私」も脅かされる。なぜか。「私」という存在はもともと現象する世界との関係においてしか生まれられないのだから。闇の中では「私」も存在しなくなるからである。

レヴィナスが不眠を通して語ったのは、存在の重み、そこから逃れることのできない恐怖である。考えてみれば、私たちがどうして存在しているのかという問いに答えることは究極的にはできない。意味もなく、始まりも終わりもなく、そこに「ある」こと。この無意味さに耐えられる者は少ない。だから私たちは、ふだんの生活の中でそれを隠し、それに目を向けないように暮らしている。しかし、不眠の夜、暗闇の中で、「ある」が剥き出しのまま襲ってきたとき、私たちは自分の存在の心許なさに気づき、恐怖に震撼するのだろう。

レヴィナスの著作を、「砂嵐のような書物」と評した人がいる。文言止めと隠喩を多用する文章は難解で、意味不明のことばの砂山の中に、理解できるフレーズを捜す方が骨が折れるほどだ。彼の過剰な語りは恐らく、事態を正確に表現するという意味では失敗している。しかし、ことばにできないことを前に沈黙するのではなく、あえて饒舌に語る彼に、私は人間的な何かを感じるのである。

さて私は、不眠の秘密が解明されて、暗闇が怖くなくなったかといえばそうでもない。ただ、ベッドでレヴィナスの本を読みながら、適度に眠くなったタイミングを見計らって明かりを消すことが、以前よりは上手にできるようになったただけである。





## 時間泥棒

総合文化学科 専任講師 増田 榮美

最近、「忙しい」「時間がない」と思うことが多くなった。歳のせいだろうか。それとも時間の遣い方が悪いのか、はたまた時間泥棒の仕業か……。などと思い巡っているうちに、ある本を読むことに考えが及んだ。30年ぶりの再会である。その本は、ミヒャエルエンデの「モモ」。児童書として紹介されており、私も当時はただの冒険本として楽しく読んだ記憶があるのだが、改めて読み返すと様々なメッセージが伝わってくる「大人の本」であることがわかった。エンデ自身、「児童文学」というジャンル分けは無意味であるし、大人にとって読む価値のないものは子供にとっても読む価値はない、と正當にも断じていることからわかるように、大人にとっても一読の価値のある本である。

ご存知の方も多いと思うが、簡単にあらすじを紹介しておこう。

舞台は、イタリア・ローマを思わせる、ある「大都市」の郊外。大昔に作られた円形劇場の廃墟に住み着いた、モモという名前の女の子が主人公である。モモには他には例のないほど素晴らしい才能を持っていた。それは、「あいての話を聞くこと」(岩波書店「モモ」p22)。心に鬱屈を抱えた人たちや子供たちがモモのところを訪れ、モモに話を聞いてもらおうと、不思議なことにトラブルは解決し、仕事も遊びも楽しくなるのだ。みんながモモを好きになり、モモもこうした人たちと友達になる。

ところが、この大都市ではその頃大変なことが起こりつつあった。時間貯蓄銀行の銀行員と名乗る「灰色の男たち」が、人々から「時間」を騙し取っていたのだ。「時間」を騙し取られた人々はいつも何かに急かたてられるようになり、「時間」がなくなり、モモのところへ行くことができなくなる。モモはカメのカシオペイアと共に「灰色の男たち」と闘う決意をし、人々の「時間」を取り戻すため「時間のくに」へ行く。そこには「時間の花」が輝くように花開いていた……。

「仕事に邁進するのではなく、ゆとりの時間を大切にしよう、本当の時間とは日々の生活なのである。」というこの物語のメッセージ性が、児童書というジャンルを超えて大人たちにも愛読されている理由の一つであると言える。

何のために時間があるのか、時間を節約することでいったい何が得られるのか……目標へ向かって一直線に進むことが真のゆとりではない。無駄な時間を省いてあくせく働いてお金を稼ぎ、節約してできた時間とお金を遣って豪遊することも然りだ。

しかし、「モモ」に込められたメッセージは「ゆとりの復権」だけなのだろうか。

「あなたの財産は5年ごとに2倍になるんです……。もしあなたが20年前に1日わずか2時間の儉約をはじめていたら……。269億1072万秒になります」(岩波書店「モモ」p87)

5年ごとに財産が2倍に増え、20年後には40倍だなんて、そんなに増えたらどんなにいいことか。つい飛びついてしまいたくなるようなどこかで聞いたことのある宣伝文句のようだが、このキャッチフレーズは証券会社や銀行が打ち出したお金の利殖システムではない。時間貯蓄銀行の「灰色の男たち」の言葉である。

エンデは生前、「時間なんて増えるはずがない。それと同じにお金が増えることさえ間違っている」と、何度もそう漏らしては経済学者たちから煙たがられていたという。5年ごとに増え続ける時間は、そのままお金の利殖システムを指しているのである。「モモ」の原文の一節を、試みに「時間」と「お金」を入れ替えてみると一目瞭然である。

「お金」をケチケチすることで、本当は全然別の何かをケチケチしているということには、誰一人気がついていないようでした……。お金とはすなわち生活なのです。人間がお金を節約すればするほど、生活は痩せぼそって、なくなってしまうのです」(原文は「モモ」より抜粋)

この一文からもわかるように、時間やお金は生活そのもので、節約したり貯めて増やしたりするものではなく、いかに遣うかが大切なのだ。

昨今、世界的な金融危機に直面している。お金を増やすために投資したにもかかわらず、増えるどころか泡となって消えてしまっている現状を考えると、エンデのメッセージがいかに正當であるかがわかる。

「重要なのは、どれだけのお金と時間を遣うかではない。それらに代弁されている自分のいのちの豊かさを、どれだけ近くに感じていられるか、この物語の鍵はそこにある」とエンデは述べている。

そうか……。忙しくて時間がないと感じていても、それが自分のいのちの豊かさにつながっている実感を持てればよいのだ。1秒たりとも無駄な時間などなく、それらはすべて明日へつながっている大切な時間なのである。

二度目の「モモ」は、「ゆとりの大切さ」と共に、「時間とお金の遣い方」を考え直すいい機会となった。

### 参考文献

子安美知子著 「モモを読むーシュタイナーの世界観を地下水としてー」 学陽書房刊



## 「本」との出会い

幼児教育学科1年 小林 春香



私が「本が好きだ」と感じるようになったのは、小学校に入学してからのことでした。図書室に出会ったのです。当時の私は、図書という言葉はよくわからなかったのですが、本だけの教室があることがとても新鮮で魅力的でした。そして毎日のように図書室に通っては可愛らしい表紙の絵本を借り、その色鮮やかな絵を眺め、おはなしを楽しんでいたものです。

私の読書に大きな指針を示してくれたのは私の母でした。母は私達姉妹を市立図書館に連れて行き、姉妹それぞれの年齢や言葉の理解力、性格等を考慮して本を選んでくれました。その時母が私に薦めたのは、絵本ではなく児童書でした。初めて手にした児童書は厚くて字ばかり。それまで読んでいた絵本はその世界に「おいで」と誘ってくれるお姉さんのような存在だったのに対して、児童書のほうは「読みたいなら好きにきなさい」と言う厳格なおじいさんみたいだと感じました。不安を抱きながらも母に励まされ、本を開いてみました。文章は多かったけれど、文字そのものは大きく、漢字にはふりがなが振ってあり、とても読みや

すくなっていました。挿絵が少なくほとんどが文章が主で、情景を想像しながら読み進めていかねばなりません。しかし、想像をしながら読むことによって、絵本とは比べものにならないくらいの臨場感を味わい、以来本は手放すことができない大切なものとなりました。

私が本と出会い、本を好きになるきっかけを作ってくれたのは、図書館という環境と母による指針でした。幼児教育においても同じことが言えると考えます。子どもは絵本が大好きです。色とりどりの可愛らしい絵が視覚を刺激し、保護者や保育者といった子どもと愛着関係のある周囲の大人からの読み聞かせは聴覚に訴えかけ、子どもの興味関心は一層拡大されるでしょう。落ち着いて絵本を見られる環境を作り、子どもの年齢や発達段階、子どもたちの生活の様子などの様々な背景を考慮した絵本を選ぶことは、保育者の重要な役割の一つだと思います。私は、子どもたちが本を好きになれる環境を作っていきたいです。



## 絵本との出会い

幼児教育学科2年 若月奈緒子



私は普段、本を読むという習慣がありません。小、中、高校では、どちらかという、体を動かして遊んだりして過ごしていました。だから、本を読むのは感想文を書く宿題が出る時くらいでした。けれど、幼い頃家にあって読んだ「こんとあき」という絵本は、なぜかとても印象に残っていて大好きです。

「こんとあき」という絵本は、小さな女の子「あき」と、そのおもり役としておばあちゃんがくれたキツネのぬいぐるみ「こん」との物語です。あきが大きくなるにつれて、こんも古くなり、腕がほどけてしまいます。おばあちゃんに直してもらおうと、二人でおばあちゃん家に向う大冒険が始まります。こんには色々大変なことが起こるのですが、あきに心配かけないように「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と言います。あきは、そんなこんが心配でこんをおんぶしておばあちゃん家まで向います。二人がお互いを思いやる心に、胸が熱くなったのを今でも覚えています。また、こんというキャラクターが私は大好きで、何度読んでも心温まる絵本だと思っています。

私は今、幼児教育学科に所属し、教育実習、保育実習を二回ずつ経験してきました。久しぶりに絵本に触れ、子どもたちは、どんな絵本が好きで、何に興味があるのかをあらためて考え、私自身は子どもたちの前に立ち何を伝えたいのか悩みながら、読み聞かせをする絵本を選びました。初めての实習では、子どもたちの様子を見る余裕は全くなかったのですが、何度も経験をするうちに、子どもたちの表情がみえてきました。とても絵本の世界に入り込んでいて、絵本の虜になっているようでした。

短大を卒業し、専門職に就く上で、私も幼い頃「こんとあき」に出会ったように、子どもたちには何か一冊でも胸に響く絵本と出会ってほしいなと思います。そのために、保育者として様々な視点から絵本を選び、読んでいきたいなと思います。そして短大にいる間に図書館に足を運び、たくさんの絵本と出会いたいです。

## ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 憧れの場所で学ぶ

総合文化学科1年 山之内美里  
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

私は小さい頃から本を読むことが好きだったので、図書館は私の好きな場所の一つでした。私のよく通っていた図書館は小規模ではありましたが、私が見たことも読んだこともない本がたくさんありとても満足できるものでした。

その図書館で働いている司書の方が当時私の憧れでした。「こんなにたくさん本を数人で管理しているなんて」と尊敬もしていましたし、司書の方の笑顔にいつも嬉しくなって自分も笑顔になっていました。こ

のような体験から私も笑顔が素敵な司書になりたいという夢をもちました。

今、その夢を叶えるために司書になるための勉強をしています。勉強は難しいですが、夢を実現するために頑張っています。

今回のインターンシップで、小さい頃から知っているあの笑顔が素敵な司書の方がいる図書館へ行きます。不安でいっぱいですが、貴重な体験なので、充実したものにしたいです。

## ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 図書館実習で学んだこと

総合文化学科2年 小宮山温子  
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

小学生のころからよく本を読んでいましたが、本が好きだという自覚はありませんでした。それが中学生になって初めて借りた本が私にとってはとても印象的で、自分のまわりにあった壁が破壊されて視野が広がったような気分を経験してから本というものを意識するようになりました。

司書という職種を知ってから本に囲まれて仕事をするのもいいなと思い、短大で図書館司書課程を履修しました。

公共図書館で実習をさせていただいた時、利用者がとても多いことに驚きました。それだけ図書館は必要とされているのだと思いました。質問も多く、柔軟に対応されている職員の方を見てすごいと思いました。また、少しでもひまがあればレファレンスの研究をし、講座が開かれるとなれば丁寧に会場の準備をし、新着

図書が届けば目録作り、ラベルはり、ブッカーかけ等々、利用者のために大変多くの業務をこなされ、「知りたい」という気持ちをサポートしていると実感しました。館内の湿度、温度も気にしたり、閉館後には毎回掃除もしていて、学習しやすい環境作りもとても大切なことだということもわかりました。

実習を終えて思ったことは、実習中、苦痛に思うことが少なかったことです。いろいろとやる事があって忙しかったのですが、やはり好きなものがまわりにあるのはいいと思いました。それから、いらぬ本は無いということです。長い間、ずっと読まれていない本でも、いつか誰かに読まれる可能性があればその本は必要な本であると今さらながら感じます。公共図書館で実際に体験することができ、本当に良い経験となりました。

## ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 私と図書館

総合文化学科 科目等履修生 山浦 陽子  
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

私の記憶に残る最初の図書館は、自分で作った図書館です。

小学1,2年生の頃の事です。自分の部屋の勉強机のいすの下に、手持ちの絵本を並べて喜んでいました。ちゃんと図書館名も、貸出規則(のようなもの)もありました。

仕事、子育てを経て、「さて、次は？」と考えた時、司書・司書教諭の資格を取ることを選びました。小学校で読み聞かせをする中で、もっと子どもたちの身近にいて、本を手渡してあげられる存在になりたいと思ったからです。

司書課程で勉強するうちに、自分の作った図書館のことを思い出しました。

「あ、小さい時の私も、こういうことをやっていたんだな」

遠回りしながら、やっと原点に戻って来た感じがしました。

今度は本当に、自分が図書館を作っていく側になります。図書館にとって、人という要素は大きなものだと感じます。短大や実習先で学ばせていただいたことを大切に、成長し続ける司書でありたいと思っています。

\*\*\*図書館ガイド\*\*\*

図書館のホームページには情報がいっぱい詰まっています。  
キャンパスの“その時”の様子も紹介！ときどきチェックしてください。

<http://www.uedawjc.ac.jp/libhp/>



(上田女子短期大学附属図書館)

上田女子短期大学のトップページからもアクセスできます。  
<http://www.uedawjc.ac.jp/>

\*\*\*\*\*

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 2008年 本学教員の最新刊著作 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

(最近発行された単独書・共著・分担執筆) 著者の五十音順

- \* 大橋敦夫先生 『事典 日本人の見た外国』(日外アソシエーツ)  
2008年1月出版 9,333円 ISBN:9784816920561 (分担執筆)
- \* 長田真紀先生 『教科書が教えない歴史有名人の兄弟姉妹』(新人物往来社)  
2008年7月出版 1,680円 ISBN:9784404035615 (分担執筆)
- \* 小野智明先生 『社会福祉施設のボランティアコーディネーション指針 はじめの一步』(社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会)  
2008年3月出版 (分担執筆)
- \* 佐藤厚先生 『朗読劇ハンドブック』(玉川大学出版部)  
1989年3月出版 5,250円 ISBN:9784472124716 (共 著)  
『やさしい表現あそび -表現あそび資料集-(児童館活動事例集v)』(社全国児童館連合会)  
1992年3月出版 (共 著)  
『生きる力が育つ二十一世紀の創作劇活動の勧め 演劇夏季学校テキスト第三次改訂版』(日本教育新聞社)  
2001年7月出版 2,500円 (共 著)
- \* 西山秀人先生 『源氏物語と和歌』(青簡舎)  
2008年12月出版 11,550円 (分担執筆)  
『新編私家集大成 CD-ROM版』(エムワイ企画)  
2008年12月出版 262,500円 (分担執筆)
- \* 浜野兼一先生 『新・保育内容総論』(みらい)  
2008年4月出版 2,000円 (分担執筆)



# 図書館 ニュース

## 第9回 七夕文学賞

◆恒例となりました七夕文学賞も、  
本年は左記のみなさんの作品が受賞となりました。

### 優秀賞

#### 自由詩

総合文化学科 二年 岡田 早耶香

風に揺れるささの葉に  
流れる天の河の音を聞いた  
太陽に隠された銀河を  
青い空に探しながら  
早く早くと  
夜を待ちこがれる

### 佳作

#### 短歌

総合文化学科 一年 中島 祥

空見上げ雲の切れ間に天の川  
輝く星に幸せ願う

### 佳作

#### 俳句

総合文化学科 一年 阿部 由里恵

田んぼ道  
螢のいない暗い夜

### 佳作

#### 俳句

総合文化学科 一年 鶴飼 愛里

鮮やかなシロップ眩しい氷のれん

※選考・添削は、大橋敦夫図書館長



## 編集後記

a postscript by the editor

小学校から中学校、そして高等学校までの児童会・生徒会活動の中で、図書委員会は、児童・生徒が積極的にになりたいと願う委員会のように。場合によっては、ジャンケンやくじ引きで負けてなれなかったという話も聞きます。その分、図書委員や図書委員長を経験しましたという学生の皆さんは、それぞれに本好きで、図書館にも一家言があるように見受けられます。

こうした本好きの思いを、大学図書館ではどのように受け止めて、それをさらに発展させていけるのか。

フィールドワークに訪れる各地の図書館でたくさんのOGに会える日を夢みつつ、そのための方策をあれこれめぐるしていきたいものです。

大橋敦夫

## みすず

第35号

上田女子短期大学附属図書館報  
2008.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館紀要委員会

発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620

Tel：0268-38-6019 Fax：0268-38-6019

E-Mail：lib@uedawjc.ac.jp